

## アマチア無線開局 60 年

JA1WOB 齋藤 章

1966 年 3 月 7 日、50Mc の AM で第一声を送信して、今年で 60 年になります。当時は 17 歳の高校 2 年生のラジオ少年でした。

アマチア無線に興味を持ったのは、高校 1 年の頃でした、高校の無線クラブの部室に行ってみると、アルミシャーシとアルミパネルに組み込んだ真空管が、丸見えの受信機や送信機がありました。アンテナも梯子フィーダで給電したものでした。スピーカからは何やら訳の分からない、日本語や英語？が聞こえていて、先輩も訳の分からない言葉でマイクに向かって話していました。

丁度その頃に、「ハロー C Q」と云うテレビ番組がはじまり、ふとした事で中学生がアマチア無線を知りハマになっていくストーリーで、自分の環境と似ているので、毎週真剣にみていました。

参照サイト：<http://dondon007.web.fc2.com/cqhome.htm>

当時（1960 年代）アマチア無線を始める必須条件としては、無線従事者免許と無線局免許の取得以外に、受信機・送信機・アンテナなどを自作出来る事でした。

メーカー製の無線機器もありましたが、貧乏高校生には高嶺の花だったので、ジャンクラジオやジャンクテレビから部品取りをして、作りました。

ゲルマニュームラジオを手始めに、5 級スーパーラジオ、そして高 1 中 1 のトリオ JR-200 のキットを、組み立てて本格的に SWL を開始したのは、高校 1 年の終わり頃でした。

当時、SWL をしていて送受信機の紹介（RIG と云わない）では、送信機の終段管や変調管の名称の 807、6146、6DQ6 や、受信機は高 1 中 2 などの構成の説明が多かった様でした。

メーカー製で多く聞かれたのは、トリオの TX-88A と 9R59・9R42 などがありました、スターは中級機の SR-550 やコリンズ風高級機の SR-600 などで、ヤエスから FL-100B や FR-100B などの SSB 機が発売されましたが、まだトランシーバーでは無く、送信機と受信機はセパレートになっていました。



「JR-200 と TX-88A で開局するのが夢でした。」

1965年10月に電話級の国試に合格する前から送信機作りは始めていたので、3月7日に局免許状の到着と同時に、50MhzでQRV出来ました。開局時は、JR-200改(高1中2)+50Mhzクリコン、自作2E26S終段管で変調6L6GB-PPでアンテナは3エレ八木でした。次に、トリオから発売された50MhzのAMトランシーバーTR-1000を購入して、自作送信機の不安定な状態から解放されて、メーカー製の安定した無線機になりました。しかし水晶の5チャンネルと1W出力では移動運用とローカル交信は問題ありませんでしたがパワー不足と固定周波数のため、日新電子のパナ6を中古で仕入れてVFO付10Wとなりました。1970年代に入り、HF帯はSSB化が進み、ヤエスのFT-401や50MhzアップバーターのFTV-650が登場し、トリオはTS-510のHF機とHFから50MhzまでのJR310、TX-310が発売されて、50MhzもSSBへ進みます。また、50Mhzのモノバンド機は、ヤエスからFT-620、ケンクラフト(トリオ)からはキットのQS-500が発売されていました。更に、日本電業のライナイ-6のモバイル機などがありました。

当局は、TS511にFTV650を接続して、50MhzのSSBにQRVしました。50MhzのSSB化もありましたが、若いハムの入門バンドである50Mhzは、松下電器のベストセラー機RJX601が登場して、トリオのTR1100、TR1200、井上電機(Icom)のFDAM3、IC71など、AM/FMのラグチューやEスポQSOが盛んに行われ、ハム人口も年々増加していく時代でした。



当時のモバイル運用は50MhzFMからはじまり、極東電子FM-10C、IcomのIC71、など弁当箱サイズに小さくなった(?)RIGでした。また、144MhzFMのモバイルはでは高利得な5/8λアンテナでも1m位の長さでも50mhzと比べて、遠距離交信が可能となりました。無線機も、トリオ、ICOM、ヤエスなどの老舗からNEC、デンソー、アルインコ、スタンダード、松下電器、福山電機、日本電装など、多くの家電メーカーやプロの通信機メーカーが参入してきました。当局は、トリオのTR-7100で144MhzのFMにQRVしていましたが、水晶12チャンネルの運用で、サブチャンネルには苦勞しませんでした。1年もしない内に、メーカー提案のサブチャンネルプランはQRMになりました。そして、70年代後半からPLLの登場で200チャンネルの出現で解消されました。

この頃から、家庭や仕事が忙しくなり、QRV 出来る時間なくなり QRT 状態となりました。

RIG も整理して、ミズホ通信の MK-610 のキットでたまに QRV していましたが、AM/CW 機だったので、AM の相手局は少なく SSB の受信が可能なのでトランシーバーでなくレシーバーとして使用していました。

1980 年代は無線局が最も多く増加した時期で、1980 年の 399 千局から 1990 年 916 千局と 2.3 倍となりました。

局免許切れのコールサインの再割り当てがあるとの情報があり、慌てて再免許申請をした事をおもいだします。かろうじて J A 1 W O B は、再割り当てされませんでした。

HF 帯の真空管ファイナルリグは姿を消して、半導体ファイナルとなりました。

VU 帯のハンディー機は小型化やディアルバンド化が進んでいきました。

Icom の IC-2N は 144Mhz の FM 機で、サムホイール SW で周波数が直接設定出来て、バッテリーパックがあり、大きさは現代のハンディー機と比べると 2 倍位あるもののハンディー機の基本となりました。

年々発表されるハンディー機の大きさは小さくなり、職場の同僚から見せられたスタンダードのハンディー機は手の中に入るほどの大きさになっていて驚きました。まだ、携帯電話やスマホ、Windows95 が出る前で、個人の移動コミュニケーションツールとしては、アマチュア無線が最先端だったにではないでしょうか。

スキー場でハンディー機をオシャレに使う映画「私をスキーに連れてって」はハム人口増加に大いに貢献したと思います。

90 年代に入ったある日、ハードオフで 430Mhz のハンディー機 2 セットが格安で購入すると、周波数を書いたメモが本体に貼り付けてありました、電池ボックスはいかにも水を被った様な錆があり、たぶんスキー場で無免許使用した様に思いました。

HF 機や V/U 機のポータブル機も小型化して周波数のダイヤル表示から、デジタル表示に変わって行きました。

バンドも 10Mhz,18Mhz,24Mhz が追加され、JARL の保証認定も 100W までとなって、アマチュア無線の最盛期に向かっていました。

50MHZ の TR-9300 や FT-690、RJX-610、LS-602 などのモバイル機やポータブル機などのオールモード機が続々と発売された時期でした。

当局は QRV 出来ない中でも、CQ 誌を最低でも年 1 回は購入して情報収集だけはしていました。

そんな 1989 年の CQ の広告にあった、ケンウッドの TS-680 や ICOM の IC-726 などの HF+50Mhz に興味が沸いて秋葉原に現物を見にいきました。

当局の知っている、ロケットは小さな店から大きなビルになっていたのは驚きであ

した。144Mhz と 430Mhz のディアルバンド、ハンディー機、モバイル機、などが所狭ましと置いてあり、やっと HF+50Mhz を見つけて IC-726 を触っていると、店員の人から、「HF モービルですか」と聞かれました。

当時、アマチア無線はモバイルがメインの運用スタイルだったのでしょね、モバイルアンテナの種類も数多くあるのは驚きました。

1990 年 7 月に、QRT 状態から IC-726S で七年振りに 7MMhz と 50Mhz で再開局となりました。アンテナは 50Mhz の 4 エレ HB 9 C V、7MH z はインバーテットダイポールでした。平屋の集合住宅だったので、屋根馬とポールでアンテナを上げる事ができました。

再開局前のログは、約 600QSO でした、再開局後 2026 年 2 月末時点では 20,600QSO となり、1990 年から 2026 年で 20,000 Q S O となります。

開局当時は AM モードから始まり FM、S S B へと変わり、1994 年には CW も開始しました。

2018 年からは、デジタルモードの JT65 に始まり FT8/FT4 による DXQSO も 1800QSO 出来る様になりました。

十年毎の交信数は下記の様になりました

| 西暦  | 1966-1975 | 1976-1985 | 1986-1995 | 1996-2005 | 2006-2015 | 2016-2025 |
|-----|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|
| 交信数 | 510       | 98        | 1815      | 2760      | 4621      | 10593     |

開局当時、50Mhz の自作 AM 送信機でローカルラグチューウーや E スポに遭遇して、J A 8 エリア、J A 6 などとの Q S O で胸躍らせていた少年時代から、6 0 年が経過した今日、移動運用でパイルを浴びる喜びや、デジタルモードの F T 8 恩恵で、小さなパワー小さなアンテナで海外の D X Q S O を楽しむ事が出来る様になりました。

今後も楽しくハムライフを続けていきたと思います。

終わり

